

眠る森のお姫さま

ペロー Perrault

楠山正雄訳

青空文庫

一

むかしむかし、王様とお妃がありました。おふたりは、こども
のないことを、なにより悲しがつておいでになりました。それは、
どんなに悲しがつていたでしょうか、とても口ではいいつくせな
いほどでした。そのために、世界じゅうの海という海を渡つて、
神様を願^{がん}をかけるやら、お寺に巡^{じゅん}礼^{れい}をするやらで、いろいろ
に信^{しん}心^{じん}をささげてみましたが、みんな、それはむだでした。

でもそのうち、とうとう信心のまことがとどいて、お妃に、ひ
いさまの赤ちゃんが生まれました。それでさつそく、さかんな洗^せ

んれい
礼れいの式をあげることになって、お姫ひめさまの名づけ親になる教きよう
母ぼには、国じゅうの妖女ようじよが、のこらず呼び出されました。そ
の数は、みんなで七人でした。そのじぶんの妖女なかまのならわ
しにしたがい、七人の妖女は、めいめい、ひとつずつ、りっぱな
おくりものを持って来るはずでした。ですから、生まれたときか
ら、お姫さまには、もうこの世でのぞめるかぎりのことで、なに
ひとつ身にそなわらないものはなかったのでございます。

さて洗礼式がすんだあと、呼ばれた七人のなかま一同が、王様
のお城にかえりますと、そこには、妖女たちのために、りっぱな
ごちそうのしたくが、できていました。ひとりひとりの食卓しょくたく
の上には、お皿さらや杯さかずきの食器しよつきがひとそろいならべてあつて、それ

は、大きな金の箱にはいつている、さじだの、ナイフだの、フオークだの、こののこらずが、ダイヤモンドとルビーをちりばめた、じゆんきんせい純金製のものでした。

ところで、みんなならんで食卓しょくたくについたとき、ふと見ると、いづどこからやって来たか、たいへん年をとった妖女がひとり、のそのそと広間にはいつて来ました。けれどこの妖女は、この席に呼ばれてはいなかったのです。

というわけは、このおばあさんの妖女は、今から五十年もまえ、ある塔とうの中にこもったなり、すがたをかくしてしまつて、もういまでは、死んでしまつているか、魔法まほうにでもかけられて、なにかかわつたものにされてしまつた、とおもわれていたからです。

王様はあわてて、この妖女の前にも、ひとそろい食器を並べさせました。でも、それはもう、大きな金の箱に入れた純金製じゆんきんせいのものではありませんでした。なにしろお客は七人のはずでしたから、七人まえのしたくしか、できてはいなかったのです。するとおばあさんの妖女は、じぶんだけが、けいべつされたようにおもって、口の中で、なにかぶつぶつ、口ごごとをいっていました。

そのとき、ほかの若い妖女のひとりが、そばにとなりあわせていて、おばあさんのくどくどいうことばを、そつと聞いていました。それで、このおばあさんが、王女になにかよくないおくりものをしようと、たくらんでいることがわかりましたから、食事がすんで、みんなが食卓しょくたくから立ちあがると、そのまま、その妖

女は、とばりのかげにかくれていました。それは、こうしてかくれていて、そのおばあさんが、なにをたくらもうとも、じぶんがそのあとに出て、すぐ、そののろいのことばを、うち消すようなことをいって、それをお姫^{ひめ}さまへのおくりものにしよう、とおもったからです。

そうこうするうちに、いよいよ、妖女たちは、それぞれ、お姫さまにおくりものことばをのべることになりました。なかで、いちばん若い妖女は、お姫さまが世界一美しい人になれますように、といいました。つぎの妖女は、天使のようなおこころがさずかりますように、といいました。三ばんめの妖女は、王女のたちいふるまいの、やさしく、しとやかにありますように、といい

ました。四ばんめの妖女は、たれおよぶもののないダンスの上じょう手ずになられますように、といいました。五ばんめの妖女は、小さ夜啼よなきどり鳥のような、やさしい声でおうたいになりますように、といいました。六ばんめの妖女は、どんな樂器がっきにも、名めいじん人の名をおとりになりますように、といいました。いよいよおしまいに、おばあさんの妖女の番になりました。この妖女は、さもいまいましそうに首をふりながら、王女は、その手を糸車のつむにさされて、けがをして死ぬだろうよといいました。

このおそろしいおくりものは、身ぶるいの出るほど、みんなをびつくりさせて、たれもお姫ひめさまのために泣かないものはありませんでした。そのときです、若い妖女が、とばりのかげから出て

来て、とても大きな声で、つぎのようなことばをいいました。

「いいえ、王様、お妃様、だいじょうぶ、あなたがたのだいじなおひいさまは、いのちをおなくしになるようなことはありません。もつとも、わたくしには、この年よりのいったんかけたのろいを、のこらずときほごすまでの力はございません。おひいさまは、なるほど手のひらに、つむをおつきたてになるでしょう。けれどそのために、おかくれになるということはありません。ただ、ぐつすりと、ねこんでおしまいになって、それは百年のあいだ、目をおさましになることがないでしょう。そして、ちようと百年めに、ある国の王子さまが来て、おひいさまの目をおさまし申すことになるでしょう。」

二

王様は、妖女^{ようじょ}のおばあさんのよげんしたさいなを、
してよけたいとおもいました。そこで、その日さつそく、国じゅ
うにおふれをまわして、たれでも、糸車につむをつかうことはな
らぬ。家のうちに、一本のつむをしまっておくことすら、しては
ならぬ。それにそむいたものは死刑^{しけい}にすると、きびしくおいわ
たしになりました。

さてそれから、十五六年は、ぶじにすぎました。あるとき、王
様とお妃様が、おそろいで、離宮^{りきゆう}へ遊びにお出かけになりました

た。そのおるすに、ある日、若い王女は、お城の中をあちこちとかけあるいておいでになりました。するうち、下のへやから上のへやへと、かけあがって行つて、とうとう塔^{とう}のてっぺんの、ちいさなへやにはいりました。見ると、そこには、人のよさそうなおばあさんが、ひとりぼっちですわつていて、つむで糸をつむいでいました。このおばあさんは、つむを使ってはならないという、きびしい王様のおふれを、つい聞かなかつたものとみえます。

「おばあさん、そこでなにをしているの。」と、お姫さまはたずねました。

「ああ、かわいいじよツちゃん、わたしや、糸をつむいでいるのだよ。」と、おばあさんはいいました。

このおばあさんは、王女がたれだか、すこしも知らないようでした。

「まあ。」と、王女はいいました。「なんてきれいなんでしょう。それはどういうふうにやるものなの。あたしにかしてごらんなさいな。あたしにもできるかどうか、やってみたいから。」

お姫さまは、こういつて、そのつむを、手にとりましたが、それは持ち方がいけなかったのか、たいへんあわてて、ぶきような持ち方をしたのか、それとも、あのわるい妖女ようじよののろいのことばが、いよいよしるしをあらわすときになったのか、とたん、つむは、いきなり王女の手にささつて、王女はばったり、そこに倒たおれてしまいました。

人のいいおばあさんは、あわてて人を呼びました。みんな、お城のそこからもここからも、かけ出してきました。お姫さまの顔に水をそそぎかけたり、ひもといて着物をゆるめたり、手のひらをたたいてみたり、ハンガリア女王の水という薬で、こめかみをもんだり、いろいろにしてみても、王女は息をふきかえしませんでした。

さて、王様はこのさわぎを聞いて、さつそくかけつけておいでになりました。そうして十五年むかしの妖女ようじょのよげんを思い出しながら、やはりこうなるうんめいだったことをさとして、お姫さまを、そのまま、お城のなかでも、いちばん上等のへやにつれて行かせ、金と銀のぬいとりをした、きれいなねだいの上にねか

しました。

ねだいの上に、すやすや眠っておいになるお姫さまの、美しさといつてはありません。それはちいさな天使だといつてもいいくらいでした。人ごこちがなくなつていても、生きているとおりの顔いろをしていて、ほおは、せきちく色をしていましたし、くちびるは、さんごをならべたようでした。目こそつぶつてはいますものの、かすかに息をする音は聞こえます。それで、王女が死んでいないということがわかったので、まわりについている人たちは、よろこんでいました。

王様はそこで、やがて人が来て、目をさまさせるまで、しずかにねかしておくようにと、きびしくおいつけになりました。

さて、王女を百年のあいだ眠らせることにして、やっと、あやういのちをとりとめた、あの心のいい妖女は、ちょうどこのさわぎの起こったとき、一万二千里^{まんり}はなれた、マタカン国に行っていました。その使っているこびとから、この知らせをすぐうけとりました。そのこびとは、『七里とびの長ぐつ』といって、ひとまたぎに七里ずつあるく長ぐつをはいて、かけて行つたのです。それで、妖女^{ようじょ}はさっそくそこを出て、竜^{りゅう}にひかせた火の車に乗ると、ちょうど一時間で、王様のお城につきました。

王様は、お手ずから、妖女を馬車から助けおろしました。妖女は、王様のなさったことを、すべてけつこうですといいました。でも、たいへん先のことのよく見える妖女でしたから、百年のの

ちに、お姫さまがせつかく目をさましても、この古いお城の中に、
たつたひとり、ぽつねんとしているのでは、どうしていいか、わ
からなくて、さぞお困りになるだろうと思いました。

そこで、なにをしたでしょうか。妖女は、魔法の杖まほう つえをふるって、

王様とお妃をのぞいては、お城のなかの物のこらず、それはおつ

きの女教師おんなきょうしから、女官じよかんから、おそぼづきの女じよちゆう中から、

宮内官くない、表役人おもてやくにん、コック長りようりばん、料理番から、炊事係すいじがかり、台所

ボーイ、番兵、おやといスイス兵、走り使いの小者こものまでのこらず、

杖つえでさわりました。それから、おなじようにして、べつとうとい

つしよに、うまやでねている馬も、裏庭に遊んでがいるむく犬も、

お姫さまのねだいの上で眠っているお手飼がいの狎ちんまでも、みんな魔

法の杖でさわりました。

魔法の杖でさわると、すぐ、たれもかれも、なにもかも、たわいもなく眠りこけてしまつて、お姫さまが目がさますまでは、けつして目をさましませんし、お姫さまに用事ができれば、いつでも目をさまして、御用をつとめるはずでした。なにもかも眠つてしまつたといつて、それはかまどの前の焼きぐしまでが、きじや、やまどりの肉をくしにさしたまま、やはり眠つてしまいました。これだけのことが、みんな、ほんの目^まばたきひとつするまに、できあがつてしまいました。妖女^{ようじよ}というものは、まったくしごとの早いものですね。

さてそこで、王様とお妃とは、お姫さまのひたいに、そつと、

やさしくほおずりして、お城から出て行きました。そうしておいて、たれもお城に近づくことはならないという、きびしいおふれを、また国じゆうにまわしました。

でも、そのおふれは、わざわざ出すまでもありませんでした。

なぜというに、十五分とたたないうち、お城をとりまわしている園^{その}の中に、たくさんの高い木やひくい木が、もつさりと茂^{しげ}りだして、そのあいだには、いばらや草やぶが、びつしり鉄条網^{てつじょうもう}のようにからみついてしまいましたから、人間もけだものも、それをくぐつてはいることはできなかつたからです。

そういうわけで、しばらくすると、そこから見えるものは、お城の塔^{とう}のてっぺんだけになりました。それも、よほど遠くにはな

れてでなければ、見えないのです。これも、妖女のみごとな、はなれわざだったことがわかりました。こうして、王女は眠っているあいだ、たれひとりおもしろ半分、のぞきにくることもできないようになったのでございます。

三

さて、百年は夢^{ゆめ}のようにすぎました。そのじぶん、その国をおさめていた新しい王様の王子が、ある日、眠る森の近くを通りかかりました。

この王子は、眠っている王女^{ぞく}の一族が、とうに死にたえて、そ

のあとに代って来たべつの王家の王子で、その日はちょうど、そのへんに狩^{かり}に出かけて来たかえり道なのです。それで、遠くからお城の塔をみつけると、あの森の中にある塔はなんだといって、おそばの者にききました。

みんなは、てんでん、じぶんの聞いているとおりをこたえしました。

なかのひとりは、あれは、ゆうれいが出るといふひょうばんの、古い荒^{あれじろ}城だといいました。

すると、またひとりが、あれはこの国の魔法^{まほうつかい}使や、わるいみこたちが、夜^{やか}会^{かい}をする場所だといいました。

そのなかで、わりあい、おおぜいのもののいうところでは、あ

れは昔から人くい鬼の住んでいるお城で、ちいさなこどもをつかまえては、みんなあそこへさらって行つて、それで、たれもあとからついてこれられないように、あのとおり、じぶんだけ通つて行ける森をこしらえて、その中でゆつくりたべるのだということでした。

王子は、このうちのどれを信じていいか、わからないので、まよつていきますと、そのとき、ひとり、この土地に古くからいる年よりのお百姓しやうが、こういいました。

「王子さま、失礼しつれいではございますが、わたくしが五十年も前、父から聞きました話では、——その父はまた、もとは、じじいから聞いたのだと申しますが、——このお城の中には、それはそれ

は美しい王女のお姫さま^{ひめ}が住んでおりまして、もう百年のあいだ、ずっと眠りつづけたあと、ちょうど百年めに、ある王様の王子が来て、目をさましてくださるのを、待っているのだということでございます。」

若い王子は、この話を聞くと、からだじゆうに、かっとなつて血がもえあがるようにおもいました。ぜひとも、このめずらしいできごとのおさまりを、自分でつけてしまわなければとおもいたちました。美しいお姫さまをさずかるうえに、たれもはいれない魔法のお城をきりひらく名^{めい}誉^よが、自分のものになるとおもうと、もううしろからからだを押しされるような気がして、さっそく、そのしごとにかかろうと決^{けつ}心^{しん}しました。

そこで、王子は、森にむかつてずんずん進んでいきますと、大きな木も低い木も、草やぶもいばらも、みんな道をよけて通しました。その広い道をどこまでも行きますと、やがてその奥おくにあるお城に着きました。

ところで、すこしびつくりしたことには、ふとふりかえってみると、家来けらいに、ひとりもついてくるものがないのです。なぜというに、王子がはいるといっしよに、すぐ森の口がしまつてしまつたからです。けれども、王子はかまわずに、ずんずん進んでいきました。若いやさしい、そして火のようにあつい心をもった王子は、いつも勇気のあるものです。

王子はやがて大きな広い庭に出ました。そこでまず見たものは、

どんなこわいもの知らずでも、ぞつとして、骨までこおるようなものでした。なにもかも、気味きみのわるいほど、しいんとしずまりかえっていました。そこにも、ここにも、目に見えるものは、人間や動物が、みんな死んだもののように、ぐんにやり手足をなげ出しているすがたでした。けれども、そこに立っている、おやといスイス兵の鼻いきは、ぷんとお酒くさいし、ぽおつと赤いほほをしているのを見ても、この連れんじゅう中は、みんな眠っているのだということが、すぐ分かりました。しかも、その手にもった茶わんには、まだぶどう酒しゅのしずくがのこっているのです、なかまとお酒さかもりのさいちゅう、眠ってしまったのだということまで知れました。

王子はそれから、大理石^{だいりせき}をしきつめた大ろうかを通つて、か

いだんの上まで行つて、番兵のつめているへやにはいますと、

番兵らは鉄砲^{てつぽう}を肩にのせてならんだまま、ありつたけの高いび

きをかいてねていました。それからまた進んで、いくつかのへや

を通つて行きますと、どのへやにも、紳士^{しんし}たちや貴婦人^{きふじん}たちが、

立っているものも、腰をかけているものも、みんな、たわいなく

眠りこけていました。とうとう、おしまいにはいったのは、のこ

らずが金づくめのきらきらしいへやでした。そこに、りっぱなね

だいがすえてあつて、四方のとばりのこらず、あげた中に、それ

こそこの世にふたつとない美しいものがあらわれました。たぶん

十五六くらいの年ごろのお姫さまが、こうごうしく光りかがやく

すがたで、眠っていたのです。あつと、おどろきながら、王子はふるえる足をふみしめふみしめ、その前にひざまづきました。

さあ、これで魔法まほうの力もいよいよつきたのでしよう、王女は、ふと目をさしました。そして、なんともいえないやさしい目で、じいつと王子のほうをながめました。

「王子さま、あなたでございましたの。」と、お姫さまはそういつて、につこりしました。「ずいぶん待っていたいただきましたのね。」

王子は、このことばを聞くと、なんといつて、心のよろこびをいいあらわしていいか、分かりませんでした。王子は、じぶんのことよりも、どんなにかよけいに、お姫さまのことを、おもつて

いるか知れないといいました。ふたりの話は、話すというよりも泣いているといったほうがいいほど、ただもう、しどろもどろなものでした。ことばは、よどみがちでしたが、やさしい心のいずみは、かえって、いきおいよく流れ出しました。

それに、王子のほうは、きまりはわるいし、ただおどろいてい
るばかりなのに、王女のほうは、なにしろ百年のあいだ、妖女ようじょ
がおもしろい夢ゆめを、それからそれと見どおしに見せていてくれた
のですから、いくら話しても話しても、話のたねがつきるとい
うことがないのです。ですからふたりは、かれこれ四時間もぶつと
おしに話しつつづけていて、そのくせ話したいことの半分も話しき
らずにいました。

そうこうするうち、お姫さまといっしよに、お城のそこでもこ
こでも、みんなが目をさしました。たれもかれも、じぶんじぶ
んのしごとを思い出しました。ところで、みんなは、さしあたり、
ほかに、くろうもくつたくもありませんでしたから、まつさき
おなかがすいて、倒れ^{たお}そうにおもいました。女官頭^{がしちう}は、ほかの人
たちとおんなじに、ひどくおなかがへつて、がまんできないほど
でしたから、だしぬけに大きな声で、お姫さま、お夕飯^{ゆうはん}のおし
たくができましたと、申しあげました。王子は、王女のお姫さま
を助けて立ちあがらせました。お姫さまは、ずいぶんりっぱなふ
うをしていましたが、なにしろそれは百年まえにはやった、王子
のひいおばあさんの着物とおなじようだということを、さすかに

お姫さまにむかつていうことは、えんりよしていました。いくら

りゆうこう

流行 おくれなふうはしていても、それがために、王女の美し

さにも、かわいらしさにも、いっこう、かわりはなかったのです
からね。

さて、ふたりは、鏡かがみの間まに出て行きました。そこで夕飯ゆうはんの食し

よくたく

卓よくたくについて、王女じよかんづきの女官きよくんたちがお給仕きゆうじに立ちました。

そのあいだ、バイオリンだの、木笛きぶえだのが、百年まえの古い曲きよくを

かなでました。それは、百年まえの古い曲にちがいありませんで
したが、りっぱな音楽おんがくであることにかわりはありませんでした。

食事がすむと、時をうつさず、大僧正だいそうじょうは、ふたりをお城の

れいはいどう

あんない

こんれい

礼拝堂へ案内して、ご婚こんれい礼をすませました。女官頭がしちうは、ふ

たりのためにとばりをひきました。

四

ふたりはその晩、ほんのわずかしか眠りませんでした。王子は、あくる朝、王女にわかれて町へかえりました。おとうさまの王様が、待ちこがれておいでになるところへ、かえって行つたのでございます。

王子は、狩^{かり}をしているうち、森の中で道にまよつて、一軒^{けん}の炭焼小屋にとまって、チーズや黒パンをたべさせてもらったことなどを話しました。おとうさまの王様は、人のいい人でしたから、

王子のいうことをほんとうになさいました。けれど、おかあさまのお妃は、もうさつそく、王子には、およめさんができていることを、おさとりにしました。

それから二年たちました。王女には、ふたりもこどもが生まれました。上の子は女の子で、これは「朝」という名でした。下の子は男の子でこれは「昼^{ひる}」という名でした。そのわけは、弟のほうか、ねえさんよりも、ずっとりっぱで、美しかったからでございます。

それからまた二年たって、王様がおかれになつて、王子が、新しい王様の位につくことになりました。そこではじめて、天下^{てんか}はれて、王女と結婚^{けっこん}のしだいを、国じゆうに知らせました。そ

うして、りっぱな儀式ぎしきをととのえて、あらためて、眠る森から、お姫さまをお迎えになりました。王女はふたりのこどもを両わきにのせ、美しい行列の馬車をそろえて、王様のお城に乗りこみました。

美しいりっぱな、いい心をもったあいてを、待っているということは、むずかしいことです。でも、待つことによって、幸福はましこそすれ、へるということはありません。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本では見出し「一」はページ上部に挿し絵があるため、他の見出しと字下げ分が異なっていました。統一しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眠る森のお姫さま

ペロー Perrault

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 楠山正雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>